

野菜団地の現状と 進め方

全国農協中央会
営農農政部次長

藤城 吉晴

政府は、さる2月、総合農政の推進についての方針を閣議決定したが、そのなかで、こんご近代農業の育成を図るために、自立経営、各種の集団的生産組織など、規模が大きく生産性の高い高能率の農業経営、ないしは農作業単位の育成、助長をはかるのとあわせて、「広域営農集団(仮称)」を育成する方針を打ち出している。

また、政府の「新経済社会発展計画」でも、これと符節をあわせ、高生産性農業の展開をはかるためには、「広範な地域全体の高い総合生産力の発現をはかるよう、整備された生産基盤や生産・流通の大規模施設など高度な装置を中核とし、分化する生産・流通の諸機能を総合化し、システム化するよう検討し、誘導することが不可欠である」とのべ、いわゆる「農業の装置化・システム化」の方向を掲げている。

ところで、系統農協が昭和36年から取り組んできた「営農団地」は、従来の主産地形成の概念を一步すすめ、農協が中心となって、作目ごとに自然的経済的条件を同一にする農業経済圏を単位として、生産の段階から流通の段階までを一貫して、生産・流通施設を核として組織化することにより、生産の計画化、技術の高位平準化、省力化、品質の統一、向上をはかり、農業所得の増大を実現しようとするもので、農業のシステム化を通ずる効率化をねらっている点では同じである。

農協の営農団地が改めて関係者の注目を浴びるにいたった背景は、ここにあるのだと思う。

野菜団地の考え方と現状

農協中央機関で、営農団地の考え方を野菜について体系化したのは昭和39年のことである。

1. 野菜団地の目標

野菜についての営農団地化をすすめる目標として、次の5つをあげている。

① 生産の計画化をすすめる。

消費、需要の動向と市場性を考慮して、品目

を選択し、品種の統一をはかり、団地として統一された計画のもとに生産を行なう。

② 市場に対応する一定数量の確保をはかる。

いかに優良品質のものであっても、少量で断続的に出荷されるものでは、市場での発言力をもてないので、市場で有利な価格形成ができるだけの生産量をもった生産団地をつくる。

③ 商品性の向上をはかる。

栽培基準の設定、共同育苗の実施等により、生産技術の平準化、規格化を進め、共同選別、
・検査を徹底し、品質の向上、均質化をはかる

④ 生産性の引下げをはかる。

新技術の導入、生産の合理化、省力化設備投資の効率化等をすすめる、生産費引下げをはかる

⑤ 販売の調整を行なう。

生産物の出荷調整と価格の安定をはかるため、計画出荷、貯蔵施設の設置、共同計算などの体制を確立する。

2. 野菜団地の体系

以上のような目標にそって、野菜団地の体系はどうなるかを図示すると次の通りである。

組 織	機 能	施 設
生産農家	野菜生産	
生産班	共同作業(助除、選別、包装荷造り等)	集荷所、共選所、防除器具等
単位協同組合	野菜生産部会 作付計画の樹立 出荷計画の樹立 自主検査 生産、出荷指導 資材の供給 集・出荷、代金精算	検査員 営農指導員 共同育苗、大型機械、有線放送、運輸等の各施設
	野菜団地協議会 総合企画 諸計画の調整と統一 必要資材のとりまとめ 出荷計画の樹立 配車指示 出荷指図 代金精算	団地専任指導員 試験圃 専門技術職員 種子備蓄倉庫 卸売、直売施設
都道府県連合		
全国連合会	生産・販売計画の調整	卸売・直売・荷捌施設 貯蔵・加工 通信施設 技術センター
	生産物の販売 資材の供給 試験・研究・指導	
	調査(市情、整地、接吻、販路開拓、販売連絡)	

3. 野菜団地の現状

系統農協では、中央会が中心となり、全国および県段階に関係の連合会の担当者をもって、青果共同対策室という組織(会議形式)をつくり、こ

の対策室に各連合会の指導、資材および資金供給、販売の機能をもちより、方針を定めて、野菜団地の統一的な普及推進にあたることとしてきた

普及推進については、野菜団地の造成の手引の作成と普及、現地研究会、および体験発表会の開催、団地づくりの中心的役割をになう「団地専任指導員」の養成研修会の開催などのほか、普及推進の拠点となる「モデル団地」制度を設けてきた。

現在、モデル団地は、次の15が設定されている。

仙南地区広域団地（宮城・きょうり、そらまめ）
岩瀬地方そさい団地（福島・きょうり）

三横野菜団地（神奈川・だいこん、キャベツ、
スイカ）

北佐久浅麓そさい団地（長野・はくさい、キャ
ベツ、レタス）

焼津市農協園芸団地（静岡・とまと、きょうり、
いちご）

田原町野菜団地（愛知・キャベツ、だいこん、
スイカ）

松坂南豊農協野菜団地（三重・いちご、だいこ
ん、レタス）

能登内浦営農団地（石川・きょうり、とまと）

北葛なす団地（奈良・なす）

平和いちご団地（奈良・いちご）

北阿万たまねぎ団地（兵庫・たまねぎ）

総社市農協園芸団地（岡山・なす、きょうり、い
ちご）

豊南農協野菜団地（香川・レタス、たまねぎ、
スイカ）

今治南野菜団地（愛媛・きょうり）

野市施設園芸団地（高知・きょうり、ピーマン、
ニラその他）

このほか、都道府県中央会が独自に設けている野菜団地がある。

これらの団地は、一部新興生産地を除けば、その規模も大きく、農協を中心に生産者組織も整備され活動も活発に計画生産、計画出荷による共販体制もすぐれているものが多く、市場における価格形成の点でも優位性を確立している。

団地としての主要な施設は、トラクター、共同育苗圃、共同防除施設、集・選果場などである。また、当然ながら、野菜法の指定対象品目を生産する団地では、指定産地として指定をうけており

農業構造改善事業で野菜を基幹品目に取り上げ施設の整備をはかってきている例が少なくない。

野菜団地の進め方

われわれは、営農団地のキメテは人と組織と施設にあると強調してきている。事実、モデル団地ではこの三つの要件が軸となって、営農団地としての展開がすすめられている。

1. 団地専任指導員

野菜団地における企画、推進の中心となる人物を団地専任指導員と呼び、団地づくりに取り組むにあたってはこの養成、配置が必須条件である。

団地専任指導員は、野菜の技術者としての資質にとどまらず、プランナー、オルガナイザーとしての素ようをもっていることが必要である。

2. 団地造成計画の樹立

野菜団地をすすめるにあたっては、3～5年の計画をたてるが必要となる。この計画をたてるにあたっては、対象地域の範囲の決定、品目の選定、輪作体系・経営類型の策定、栽培方法の統一、対象農家の資格条件・生産目標・生産計画、資材の共同購入・低利資金の導入の方法、生産・流通施設整備計画、出荷規格・検査、販売計画、共同計算の方法、価格共済制度などが検討され、計画の内容に盛られる必要がある。

3. 生産者組織と推進体制

野菜団地を構成する生産者を農協野菜部会に組織する。部会は農協の内部組織として位置づけられるが、その運営については、生産者の自主性が尊重され、常に強い団結を保持し、統制力ある活動が行なわれるよう育成することが大切である。そのためには、部会の下部組織として、部落または集落を単位に支部または生産班をおき、ここが共同生産活動の拠点となるよう組織化する。

また数農協にまたがる広域団地の場合は団地協議会を設け、統一ある推進をはかる。

4. 団地施設の体系的な整備

野菜団地における共同利用施設としては、トラクター等の大型機械、共同育苗圃、灌水施設、共同防除施設、土壌検査および消毒施設、集・出荷・共同選別包装施設、貯蔵施設、加工施設、輸送施設などを、団地の実態に即して体系的に整備し効率的に利用されるよう施設の機能に応じて農協、生産班などで分担して設置するよう配慮する。

火山灰砂土では90mmまでは流亡量が少ないが、180mm以上になると急に増加し、火山灰砂土のほうが、硝酸態窒素の流亡しやすいことを示している。

3. 総括

以上試験の成績を検討してみると、米国におけるネーブルオレンジの成績では、硝酸石灰が良好な成績を示したにもかかわらず、ポット試験では

第6表 葉分析 (乾物中)

Table with 7 columns: 処理区, チョッソ (%), リン酸 (%), カリ (%), カルシウム (%), マグネシウム (%), マンガン (ppm). Rows for 1968 and 1969 (9月採葉) with 4 treatment areas each.

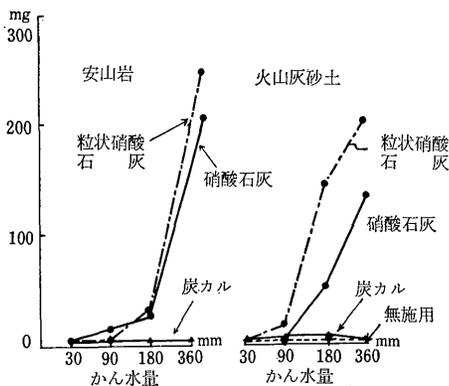
その肥効が十分ではなかった。

第7表 表層上のpHおよび置換性カルシウム

Table with 4 columns: 処理区, pH (H2O, kCl), 置換性カルシウム. Rows for 1, 2, 3, 4 treatment areas.

これはポット試験ではかん水や降雨のため窒素が流亡しやすいためであって、圃場における試験では、も

第2図 硝酸態窒素の流亡量



っと肥効がでるものと考えられる。

一方、水、砂耕試験のように溶脱の全くない条件においても、硫酸に比べて硝酸石灰のほうが葉色が悪く、葉のチョッソ含量の低いことが認められており、硫酸と硝酸石灰とは窒素の同化に差異があるように考えられるが、詳細については不明である。

いずれにしても、硝酸石灰は土壌を酸性化しない良好な肥料であるが、わが国のように夏季に雨の多い国では、施肥方法に十分注意する必要がある。

粒状硝酸石灰のように塩基性の硝酸石灰は、土壌の酸性化を防止するので、酸性化防止のために、窒素肥料の一部として粒状硝酸石灰を用いたほうがよい。

また雨の少ない時期の施肥には、硝酸態窒素の施用が有効である。

<目次>

- みかんと硝酸態窒素 (2) 農林省園芸試験場 石原 正義
施用チッソの形態とそ菜の生育 (5) 東京大学農学部教授 岩田 正利
リンゴと磷酸 (9) 青森県りんご試験場 清藤 盛正
野菜団地の現状と進め方 (11) 全国農協中央会 営農農政部長 藤城 吉晴
新しい農業とその使い方 (その4) (13) 農業技術研究所 能勢 和夫
無事雪中で越冬した野積みの燐硝安加里 (14) 青森県農協中央会 営農指導部 長谷川辰雄
この頃のミカンの動向<解説> (16)